

よこはま発！海辺の環境教育 一人と海をつなぐー

日時：平成 26 年 1 月 25 日
場所：日本丸メモリアルパーク内 訓練センター
主催：NPO 法人海に学ぶ体験活動協議会

開会の挨拶

スピーカー：NPO 法人海に学ぶ体験活動協議会 代表理事 三好利和

このフォーラムは 2007 年から開催をして今回は第 8 回となる。CNAC はもっともっと海に親しみ色々なことを海から学ぶ活動をできればと思い活動をしてきた。その中で、横浜で海辺の環境プログラムを古くから活動している団体がたくさんある。その地で全国フォーラムを開き、もっと多くの人が海辺の活動に参加するきっかけになればと考えている。本日この会場で、もう一度海について考える時間を設けたいと考えている。

来賓挨拶

スピーカー：国土交通省港湾局 海洋・環境課長 津田修一さん

四方海に囲まれたこの国に取りまして、物資の運搬、水産業など、海は私たちの生活に密着している。その海の環境を守っていくのは大事。また、海は釣りやマリンスポーツなど楽しみの場所でもある。また、最近では洋上の資源・風力発電など新しいフロンティアとしても期待されている。こうした沢山の恩恵を与えてくれる海を次世代に継承していくためには、やはり海について十分に理解を深め、環境を守っていくことが大切と考えている。私どもは、NPO 団体、企業や研究機関と連携し、港湾局も海に親しむ、学ぶ場の活動を推進している。最近だと UMI (海プロジェクト)として、横浜の一部を開放し民間企業によるアマモの再生などの活動もしている。今回のフォーラムでは、横浜をベースとした都市型の環境教育の活動事例がたくさんある。それらの事例は、他の地域でも十分に活用できると考えるため、このフォーラムが、交流を深められる有意義なものになることを願う。

スピーカー：公益財団法人 帆船日本丸記念財団 会長 金近忠彦さん

この日本丸メモリアルパーク内のみなと博物館長をしているが、このような全国フォーラムでご利用いただき大変ありがとうございます。この施設が全国への情報発信の場となることは私たちにも有益である。今、横浜市では港湾計画の見直しをしている。その中で、みなとみらいの周辺を海辺の環境の中核にしようと新しい事業を考えている。私ども日本丸記念財団も、帆船や博物館の運営だけではなくシーカヤック事業など周辺海域での事業を展開しようとしている。この内港全域、高島から山下公園にいたるまでシーカヤックで行く、海から街を見る、海辺を陸からではなく海側から親しむことを狙っている。様々な団体とタイアップしてみなとの街づくりに寄与していきたいと考えている。

キーノートスピーチ

プレゼンター： 水井 涼太さん

横浜国立大学 統合的海洋教育・研究センター 特任教員

NPO 法人ディスカバーブルー 代表理事

いつまでもこの海と暮らしていくために ～海と向き合う社会をめざして～

海洋の総合的管理と海洋リテラシー

1996 年日本が批准した国連海洋法律条約を受け、2007 年に施行された海洋基本法・海洋基本計画が策定された。

その基本的施策の中でも次の2つ施策が大切と考えている。

1. 環境汚染や海洋利用、生物多様性の減少など海の諸問題は様々な分野に密接に関連しているため、縦割りの管理ではなく、総合的な海洋管理が必要。大学でも人材育成に力を入れている。
2. 海洋に関する国民の理解と増進：海洋リテラシー
 - 1.の海洋の総合的管理を実現するには、2.の海洋リテラシーが必要。
海洋リテラシーとは、「海の人への影響と、人の海への影響についての理解」
海をただそこに広がっている景色の一部ではなく、自分たちの公共物ととらえる気づきが必要。
そのためには小学校からの学習指導要領に海の知識を入れようと大学を中心に取り組んでいる。

Discover Blue のアプローチ

人と海をつなぐかけ橋になり、海のバリューチェンジを起こす。海の生物ともっと触れ合ってもらうことで、人々に海は実はこんなに楽しいんだと知ってもらうことで、海にもっと関心を持ってもらう。

Discover Blue の活動事例

1. 「人」と「海」をつなぐ架け橋となる事業
2. 「海」を知り、みまもるシステムを構築する事業
3. いつまでもこの海と暮らしていける社会を構築する事業。

具体的には、神奈川県真鶴町にて、密漁やごみなどの海の利用マナーの悪化、住民の海に対する知識不足、また環境資源としての意識不足などの課題を、海を触れ・知る機会を増やす事業をしている。

活動内容

1. ステークホルダーとの連携
Discover Blue が中心となり行政、観光協会、漁協、博物館そして大学をステークホルダーとした協議会を設置。一般市民に海を知ってほしいと思う人々が連携し合ってイベントを開催。
2. 海と親しめる場づくりを提供
 - 海のミュージアム：プランクトン観察会 水中映像上映会 etc
 - 真鶴自然こどもクラブ：夜のプランクトン観察会、冬の真鶴半島探検 etc
 - 町立遠藤貝類博物館：展示のみならずレクチャーを開催 etc

いつまでもこの海と暮らしていくために

行政・漁協・住民・その他のステークホルダーとの連携が地域での浸透につながっていった。海を知ってもらうことは、地域での社会教育と海の自然を活かした観光や体験学習とセットそこに海があることを気づいてもらい、海辺は地域の共有財産との認識を深める。

活動事例① 都会の水際線公園で遊ぶ

プレゼンター：古川 恵太

横浜国立大学 客員教授

NPO 法人海辺つくり研究会 理事

場所：高島水際線公園：横浜駅から徒歩 5 分ほどの帷子川河口付近にある公園

主催：都市型干潟の楽しい使い方研究チーム

なにで遊ぶ？

楽しみのバリエーション

- ① 探す：干潟の地面は広いので、その地面で何がいるか探す。
干潟はパッと見た時何も無いが、ザルを使って砂の中を探することで、生き物に出会える。
- ② 驚く：ずっと水が溜まったままの池で、網を張り何かをとって見てみる。
タッチングプールで魚を見せると、生で魚を見ることで驚き生まれる。
- ③ 自慢する：池の中に釣り堀りで生き物たちを釣る。
釣り堀りで魚や手長エビなどを釣り、こんな大きいのが釣れたよ！と自慢ができる。

遊び方のコツ

- ① 真似をする：指導員として指導するのではなく、親が子供に教える形にする。
場所とノウハウを教えると、指導員なしでも、子どもは親のやり方を見て真似る。
- ② 違うことをする：皆が同じ場所で同じことをしようとする時に、違う方法を考えていく。
何か人と変わった方法を考える・人と違う場所へ行くなどして他人より多く釣ろうとする。
- ③ 守り、甘える：親が子を補助する。そして、大人は自分の子以外の子どもたちも見守るようになる。
親は釣りなど水辺近くで遊ぶ際に、子の安全を確保しようと見守り、また、子どもを補助する。
そして、子どもは親に自分自身を預け甘える。

隠された工夫

そこに集まる人々が、できる限り多くの生物を直接見て触れる環境になるよう公園設計した。

- ① 住み処
奥に水たまり。中間には底浚いをして魚を取ることができる池 壁には蟹パネル。
干潟も高低がある。地面には珪藻類や砂粒が荒い土と、粘土質に近い細かい砂を混ぜている。
- ② 川と海のつながり
川と海が水と生物がつながっている。表層が川の水、低層が海になっており、どちらの影響もある場所
- ③ 酸素と温度
水深を調整し、酸素が十分ある状態を保ち、生き物たちが住みやすい場所にした。

その他、人がアクセスしやすい環境にした。

- ・ 階段・スロープを付けたり、ライフジャケットや監視員などを用意し、安全に配置した。
- ・ 荷物が多くなる場合があるため、保管するための物置を用意した。
- ・ 水・電気・トイレの他、日陰用のタープなども用意した。

広がる人の輪

手伝える人は色んなノウハウの人が集まるといい。また、管理者、資金提供者、専門家や研究者、通りすがりの通行人など参加する人に制限を付けないことで交流の場を増やしていった。

活動事例② もっと遊ぼうハマの海！

プレゼンター：吉野 生也さん

ハマの海を想う会 代表

ハマの海を想う会(ハマ海会とは)

2010年に活動を開始。「もっと遊ぼうハマの海！」をスローガンに海辺での市民活動の機会を提供し、海に
関心を持つ人を増やすことが、人材育成となる。そして、環境美化活動へとつながる。

ハマ海会設立のきっかけは

浮世絵などでみられる昔の東京湾近郊の暮らしでは、当たり前のように釣りをする人や、小舟に乗って水辺
でくつろぐ人たちがいた。しかし、今では都会の水辺には、様々な注意・禁止看板がある。

例：投げ釣りは禁止です @ 山下公園&象の鼻パーク

「さく」にのぼらないで！ うみにおちます @ 象の鼻パーク

気が付けば水辺だけではなく、街中には「禁止看板」が至る所にある。そんな住みづらい街になってしまっ
た原因は、すぐに港湾局などの管理側にクレームを言う利用者が増えた。つまり、各利用者が気をつける
のではなく、自治体などの管理側がすべての責任を負う社会になってしまった。そして、元々持っていた他
者への心配りや寛容さ、美意識などの「おもてなし」の心が薄れ、ギスギスした社会になっていっている。

このままでは、どんどん住みづらい環境になっていくのではないか。という危惧を感じた。

昔ながらの「おもてなし」のある環境にするには、特に海辺などの危険が伴う場所では利用する側の意識を
変えていく必要があると感じた。

取り組み

遊びを通じ、海を楽しみ、その素晴らしさに気づいてもらえる取り組みを提供することで、より多くの人に海
に目を向けてもらう。海に目を向けて、関心を持ってもらうために遊びを通じたイベントで市民をフックするこ
とが、ハマ海会の役割と感じている

最初の取り組み：環境美化活動

横浜市港湾局みなとみどりサポーターとして象の鼻パークでお掃除隊

毎月第一土曜日開催。Web 検索などで人が集まり、これまで 39 回 4010 名の市民が参加

→この環境美化活動に人が集まったことで、もっと何か違うことしようと、他の活動へつながった。

釣り教室

横浜開港祭で釣り教室&キャスティングゲーム - 2011~13年で約3000人が参加

釣り大会

サイズを競うルアーシーバス釣り大会「ハマ海杯」

横浜の海でも大きな魚が釣れることを知ってほしい。法令順守は参加者の自己責任としている。

船上カメラマン・プロジェクト(2014年2月15日開催予定)

乗船を体験しながら、船上からの風景を写真に納め、Facebookなどで海の楽しさを世の中に発信するプ
ロジェクト

船に乗ったことない人に感動を与える。横浜の海の美しい景観を知ってほしい。また、Facebookを通じて
世界へ横浜の美しい海を発信できる。

→小型船舶の免許を持っている仲間がいて実現できる。

関係団体の連携

高島水際線公園モニタリングや横浜 初黄日商店会でのハセ釣り大会の運営協力など

横浜運河パレードなど、関係団体等の活動に協力

活動事例③ 夢ワカメワークショップ

プレゼンター: 鈴木 覺さん

NPO 法人海辺つくり研究会 理事長

夢ワカメ・ワークショップの始まり

京浜臨海部の浄化プロジェクトの一環として平成 12 年に一度行い、それが新聞で紹介されたことなどから、平成 13 年「夢ワカメ・ワークショップ」として始まる。

ワカメの育成を通して、自然との関わりを知っている人々を育成し、より良い海の環境のためにできることを考えるワークショップとして、考え・見せる・体験などを含む調査・体験・実験・観察・発表を行う。

すべて主催者側の目的を参加者に伝える盛りだくさんのワークショップとして始まる。

つながりが生まれる

最初わかめの種付けができず、そのため昆布を使う。その昆布が横浜の海では暑くて夏を越せないという理由から、釜石に移植するプログラムとともに「おい SEA たの SEA 釜石ツアー」を開催。

釜石サイドの協力を得て、子どもたちが様々な体験をする。

1 日目: 農業体験・清流体験・スノーケリング体験・民泊など

2 日目: 自然学校を開催し、生き物観察やシーカヤック、スノーケリング、海岸清掃を体験

豊かな海づくり大会へ

日本丸水面から臨港パークの片隅へ場所を移動し、プログラムがシンプルになる。

・ワカメの種付け体験

・いかだ作り

主催者はいかだを作る。

参加者はマイワカメのタグをつくり、種糸を取りつけていく。

気が付けば、座学中心のワークショップから、参加者が楽しむイベントへと変化していった。

参加希望者が年々増大

平成 13 年 90 名→平成 18 年 283 名へ。平成 18 年以降は対応困難なため、300 名弱で参加応募を締め切って対応してきた。

参加者は毎年初めて参加する人が半数以上。多くが口コミへと広がっていく。

参加団体も平成 13 年度は 5 団体だったのが、平成 25 年度は 15 団体へと広がりをみせる。

海との直接的つながりのない団体とのつながりへ

NGO 団体 地球市民 ACT かながわ がプログラムに参画。

ヨード不足による健康被害が出ているアジア山岳地帯の子どもたちへ、ヨードが豊富なワカメを送るプロジェクトが開始。

新たな展開へ

今では、特定の団体のプロジェクトから沢山の方が関わるプロジェクトへ。

環境教育・環境改善のために主催者側が育成する目的で企画・運営したプログラムは、参加者が楽しみながら自分から自然と関わり遊び、楽しむプログラムになり、今や「冬の風物詩」「そこに当然ある風景」になりつつある。つまり、その当たり前風景が、環境を知ることにつながっている。

そして、今、楽しいイベントとなっているのに、参加者のアンケートを見ると環境教育をしている感覚を持ってもらっている。

活動事例④ 森と海を繋ぐ侍従川と、侍従側での活動

プレゼンター:山田 陽治さん

ふるさと侍従川に親しむ会 代表

活動拠点

侍従川:横浜市最南端の金沢区を流れる全長3キロ弱のすごく小さな都市河川

| 6

活動内容

子どもの頃は川の汚染がすごくて、どぶ川だった。しかし、一緒に活動していた中学生がメダカを発見し、それならもっとこの川の素晴らしさを知ろうと活動を開始。

現在、調査・保全・啓発・体験の4つの活動を柱として活動している。

川の始まりにて

子どもたちと森探検をし、トンネルや遊べる木がある。また、色んな花やキノコ、虫などを発見・観察する。

生き物だけではなく、山菜を採り、山菜パーティを開催。また、冬はツルを取ってかごを作る。様々な森の恩恵を受けた活動ができる。

源流の小川にて

水がきれいなところに住む生き物がいっぱいいる。様々なトンボなど。また、ホタルもいる。

元々はホタルはいると思っていたが、中高生の調査で発見し、今では住民が観察に来る。

街の中にて

残念なことに三面コンクリートになっている。このあたりは生き物もあまりいない。

川幅が広がる中流域にて

中高生と一緒に水草などを植えていった。そこに、カルガモが雛を育てたり、色んな生き物が住む。

青大将の抜け殻など、子どもたちにも沢山な発見がある。

月1回の清掃活動

活動当初は、ものすごくゴミが多かった。バイクなどの大型ゴミが落ちていた。しかし、川で遊んでいる子どもたちの姿を目にするようになり、地域の人々の意識が段々と変化しゴミを捨てなくなった。

葦原の形成

中高生とアシを植えた。枯れると小学生たちが刈ってくれる。そして、それで葦舟を作る活動をしたり肥料にしたりしている。

いかだ下り

海までいかだを下る活動をする。いかだを作るところからする。

活動の成果

地域の認識の変化

活動当初は、「川に入るな」などの禁止看板があったり、入っただけで怒られていた。しかし、今では川に入って遊ぶのが風物詩、当たり前になり、地域の人々の侍従川との意識が変化していった。

流域の小学校での活動

侍従川の流域の小学校が、清掃活動など色んな川に関する活動をするようになった。

生物の多様化

メダカが戻ってきた。ウナギもいる。様々な種類のトンボも色んな箇所でも生息するようになった。また、下流ではイソギンチャクやアカニシ、テナガエビなど蟹なども見られる。また、色んな鳥類もいる。

パネルディスカッション「都市型の海辺の環境教育を考える」

コーディネーター：CNAC 副代表理事 神保清司（大房岬少年自然の家 所長）

パネラー：水井涼太さん 古川恵太さん 吉野生也さん 鈴木覺さん 山田陽治さん

海について学ぶ機会を地域で作ることについて

| 7

神保：水井さん、子どもたちは学ぶ機会がないという危機感を覚えたとのことでしたが、子どもたちと接してみても、また、学校教育と接してみても感じられたことは？

水井：子どもは機会さえあれば楽しんでくれる。子どもたちはコツを覚えると色々なことができ喜んでくれる。親も夢中になる。真鶴だけではなく、横浜からも参加者がいる。

しかし、一方で、学校は他のカリキュラムがもういっぱいなので新規にプロジェクトに参加する余裕がない。また、安全面への懸念も持っている。また、教師の海への理解も不足しているのでチャンスは少ない。そのため、学校長に理解があり、担当となる教師のやる気がある学校のみプロジェクトができる。つまり、教師への啓発活動が必要と考えている。

神保：古川さん、生きた魚を触れることの反応についてお話されていたが、その学ぶ機会を与えるということにどうお考えですか？

古川：魚を触ることへの喜びが大きいと感じる。初めは、どうやって触るかもわからない。しかし、子どもは機会を与えると自分たちで消化して、自分たちで何かしていく。つまり、鈴木さんが言われていた通り、機会さえ与えれば自然に学んでいくんじゃないか。だから、そのためには何を留意してあげるかを考えていく。うまくその機会を使えるようなものを留意する私たちの役割ではないか。

神保：吉野さんは、人々の意識を変えるための最初のフッキングをされているとのこと。そのツールとして遊びを活用されているのですが、その部分で大切にされていることは？

吉野：私たちは自分たちが楽しみたい・遊びたいという思いから活動を始めた。例えば、ある遊びを企画すると、条例など色々な障害がある場合、組織として許可をもらおうと、特別にイベントとして活動が可能になる。関心の高い人はできるが、海で遊ぶにはどうすれば良いのか分からないというような人へのアプローチが大切と考える。清掃活動も、海と陸で管轄が違い、陸の許可は出ても海はできないなどの障害があった。しかし、ちゃんと各省庁に許可を取ってできるようにした。

神保：鈴木さんは「これが環境学習なのか」と言っていましたが、今後、大きくなってきた夢ワカメ・ワークショップをどのように継続されていきたいと考えていますか？

鈴木：夢ワカメワークショップは、自分で何かしようとして今の形になった訳ではなく、周りの状況に応じて今の形になった。正直なぜ人が来るかよくわからないけれど、何か楽しさがあるのだと思う。今ではリピーターが半分、新規が半分になっている。

神保：参加者は横浜市内が多いか？

鈴木：ほとんどが横浜市内からきている。若干名、東京から来ている。

神保：山田さんは、侍従川での活動を 20 年間続けておられるというのは素晴らしいと思います。ずばり 20 年なぜ続けているのか？

山田：それはよくわからないが、好きなことをさせてもらってきた。20 年続いたおかげで、このような体験学習・環境教育の道で生活できるようになったことはありがたいと思っている。子どもたちと成長することができたと思う。そして自分の生まれ育った愛着のある川だった。子どもたちと、楽しく 20 年できたと思う。

神保：20 年していると最初に参加した子どもたちは、大人になってまた活動に関わったりしているのか？

山田：最初に関わった子どもたちは、現在 34 歳になっている。その中で会報を書くなどするスタッフになった

人もいる。また一度離れても、また親となって子どもを連れて参加している。また、人手が必要な時に来てくれる。また、現在、中高生の部を率いているリーダーも卒業生である。

神保: 古川さん、吉野さんは比較的最近取り組み始めた活動だと思いますが、これから 20 年先どう続けていかれたいと考えますか。対地域とのつながりという意味では参加者はどうですか？

古川: 高島水際線公園に関して言えば地域とのつながりはすごく高いです。すごく大きさに募集していないこともあって、通りかかった人を呼び込んで参加してもらい、次回からも来てもらうという活動をしている。その時公園を散歩している親子連れがメインのため、地域の人が多い。できれば、周辺の人たちに気が付いてもらったら、自分たちのモノとして使い方を考え始めてほしい。彼らが 20 年先そこに付き合っていく認識を持ってほしい。

吉野: 私たちの活動も横浜からの参加者が多い。侍従川の活動を聞くと、自分たちの川という愛着を持っているから継続できているのが素晴らしいと思う。しかし、横浜は観光の町となっている面もあり遊びに行く場所との認識が低い。横浜でも遊べるんだ、遊ぼうよという活動をしていくと、愛着を持てる人が増えて、10 年 20 年とこの街中の港湾部でも海で遊ぶ人が増えると考え、そこを目指したい。

神保: 子どもは機会を与えればすぐ海に親しめるんだなという実感があるんですが、大人も今は、海に触れる機会がない、または子どもの頃海に触れずに育ったという現実があると思う。大人が気付くまたは楽しむ手法はどうお考えですか？

水井: 正直なかなか良い例は思いつかない。一番有効だったのは、プランクトン観察会だった。こんなに多くいるのかと漁師ですらちゃんと見たことがなかったため、ショックを受ける人が多かった。つまり、大人でも海の本物の姿を見せるというのはインパクトがあると思う。

組織の活動を継続するための資金源について

神保: 組織を保つ、または活動を継続するための資金源についての、課題や苦労などありますか？活動経費の捻出方法ですね。鈴木さんは、夢ワカメワークショップは今後実費とのお話がありましたか？

鈴木: 今年から実費ではなく 500 円を徴収しています。今までは、セブン-イレブンなどの助成金でしていた。

神保: 500 円でなんとか赤字にならないですか？

鈴木: なります。

神保: その赤字の部分は？

鈴木: いかだ作りにすごい費用がかかっている。

神保: なるほど。それは？

鈴木: 夢ワカメワークショップは助成金をいただいている。

神保: 他の方は参加費は？ 山田さんの活動は参加費や会費があるんですか？

山田: 参加費は実費で徴収している。会費は子ども 1500 円、大人 3000 円です。ただ、会員ではなくても参加できる。ただ非会員は参加費を実費で 2 倍など少し会員との差別化をしている。ただ、参加費は 100 円とかモノを食べる費用などだけで、探検や川掃除とかは無料。財政難だが、貧乏に慣れて、なければないでよい。今年もあまり使わず過ごせたとする。つまり、やれてしまう。

課題としては、事務職をできる人がいないため会としての土台づくりができていない。みんな勝手に好きなことをしている。そのやり方が居心地が良い人が残ってくれていると思う。

神保: 居心地の良さはモチベーションを保つ意味でも大切ですね。

山田: そうですね。そこは、子どもにとっても大事にしたいと考えている。しかし、子どもの居心地の良さを保つと、大人の居心地が悪くなったりするのでそのバランスを取るのが難しい。昔は暴走族などの不良の

子たちが来ており、今は不登校の子供たちがいる。その子どもたちに大人の論理を押しつけると、すぐ壊れてしまう。なので、子どもの居心地を守ってきたため、大人の居心地は悪かったかもしれないと思う。

神保: 古川さんの活動資金はどうされていますか？

古川: 日々の活動そのものに関してはあまり費用がかからないため、各自がすこずつ都合している。ただし、例えば施設や階段を準備する、水を引いてくるなどの設備面では、小さな助成金と会費ではできる範疇ではない。そのため、活動の基盤となるインフラ・施設は、行政に用意してもらうことが一番大きな見えない資金調達だと感じる。構造を変えることは地域・港湾計画に組み込んでもらい、その他は、自分たちで調達する。また、地元の企業の助成金の仕組みには感謝している。高島の場合は、みなとみらい 21 の助成金を活用した。

神保: 吉野さんの活動はどうですか？

吉野: 私どもも、お金がかかることをしていない。ただ、開港祭の釣り教室については、行列ができる。たまたま、協賛してくれる企業があるため、景品などは無料で調達できる。しかし、スタッフは、最初は指導に来てくれた人たちは喜んでいて、次年度からは段々と疲れが出たり、その教室の成果が、清掃活動への参加など他の活動に結び付かない場合、「何のためにしているのか？」と疑問を持つ人が出てくる。また、指導員をすることを義務的に感じる人も出てくる。みんな自腹で準備しているので負担もそれなりにあったので、去年は参加費として 100 円取り、活動費用や打ち上げ費用とした。また、古川先生がみなとみらい 21 から助成金をいただいたことを知り、「船上カメラマン プロジェクト」では初めてみなとみらいの財団から助成金をもらった。棧橋や船を借りる費用とかに充てた。

神保: 水井さんの活動は、大学初のベンチャーを立ち上げて、NPO 法人資格を取って活動しています。キーノートのプレゼンテーションの中でも色々な助成金について発表がありました。資金源の調達について話せる範囲で教えていただけますか。

水井: 正直資金の調達は苦労以外したことがないのが事実です。立ち上がるまではソーシャルベンチャーとして顕微鏡を買いそろえるくらいの資金はあった。現在、真鶴町と密に組んで活動しているが、町からの資金だけでは足りない。私立の学校などでの活動は、基本的には費用をちゃんと請求する形で実施している。その費用設定を決めるのに苦労する時もある。費用を請求しても当然のように赤字である。そのため、自分自身は大学で働いている。ただし、真鶴町の場合は、3 年度目になり、私が企画し申請書を書いて委託を受ける形で活動している。そして、今後は、町の予算案に活動費用を組み込んでもらえる形に持っていける可能性が出ている。助成金ではなく行政の本体予算から活動費用が出るということは、ある意味、社会システムに組み込まれたという証のため、今後はこの形を目指していきたいと考えている。横浜市も予算に組み込んでもらえたりすると、他の団体とも連携して色々なことができると思うので、そのようなアピールをしていきたいし、そのような活動が市町村で必要だと認識してもらえるようにしていければ状況が変わっていくのではと考えている。

神保: 会場の方々には、事業継続のための資金調達について、同様の体験談やパネラーへの質問などありますか？ 鈴木先生どうでしょうか？

鈴木(亀の子隊): 自分のところ(愛知県田原市)では、公共交通網がないため子どもたちが参加する場合も親が釣れて来なければならないため、活動を継続しているための参加者を集めることに苦労している。参加を募集する場合、市の教育委員会の協力の下、市内の学校にチラシを配る。しかし集まるのは 30

名程度という現状。メインの活動は月1回の西の浜のゴミ拾いと年に6回の体験型環境教育をしている。ゴミ拾いについては、参加費は取らないが、環境学習については、ある程度徴収している。しかし、基本的な資金源は、諸所からの助成金である。また、賛助隊員を募集しているが、毎年人数が変動し固定はしていない。今後は私たちの活動も、行政から本体の予算をもらえる提案をしていきたい。

神保: 亀の子隊は何年継続していますか？

鈴木: 15年過ぎて、田原市より表彰をいただきました。

神保: 亀の子隊も、卒業生が手伝いに来てくれる？

鈴木: 絶対ではないが、高校卒業した子どもたちに声をかけると手伝いに来てくれる場合がある。

様々な団体の連携について

神保: 今日のパネラーの方はお互い顔見知りの方が多いようですが、他団体との連携は新しい方向性が生まれるなど、お互いの助けになるものですが、横浜での他団体・行政との連携について、今後の方針をお聞かせください。

山田: 団体を超えて交流すると刺激になるので、寛容な団体なら、やってみたい思いはある。歴史的にみて、ネットワーク作りが横浜は盛んである。しかし、徐々にネットワーク作りが主になってきてしまった歴史がある。そのため、私の団体はネットワークを断った経験がある。でも、金沢区内の市民活動、横浜の、川の市民活動、また、子どもの活動というキーワードでだけはネットワークをつないでいたが(当時は、その三つのネットワークだけは断たなかった。今はこだわりはない)。ネットワーク作りにも疲れてしまわないような範囲で、今後は、刺激し合える連携については機会があればしたいと考えている。

鈴木: 海辺つくり研究会は、会員はほとんど有識者または情報を得たいという人が多い。要するに、会として自分たちの仲間と何かするというより、色々な人たちの力を借りて役割分担で活動するのがメインである。連携よりも様々な人たちがいないとできない。

神保: 私は、連携がうまくいっていると感じている。おそらくキーマン(人材)がいるからではないか。

水井さんの団体はスタッフ何名で運営されていますか？

水井: 現在は、常勤が1名と非常勤が3名です。連携については、私の団体は鈴木さんのところと同じで連携なくしてはできない状況があり、漁協などと協力して活動している。また、真鶴町以外での活動でも、現地でカウンターパートなる協力者と一緒にイベントを実施している。また、今年はサーフィンの団体からの環境教育の要望があり実施している。海の活動は、カウンターパートとなる協力者がいないと成功しないと思える。

神保: そういった相手を見つける苦労、連携する苦労はありますか？

水井: 苦労というよりも、ご縁でしている。また、神奈川県の場合は、NPO と企業のマッチングを県で実施してくれる制度があるのだが、これまでは、活動内容に賛同してくれる方が、協力者を紹介してくれる形で活動が成り立ってきた。そのため、苦労して探した経験はない。

神保: 県のNPO と企業のマッチングの仕組みとは？

水井: 資金を提供する否かは別として、CSRの一環などの理由で地域への貢献を考える企業を集め、予算を集めるといふNPO と企業のマッチングフォーラムを神奈川県のNPO 協働推進課がしている。

たいいてい10~20例ほどのマッチングが行われる。行政側も、財政難のため企業の力を借りないと様々な事業ができないという理由がある。

注)NPO と企業のマッチングフォーラム: 企業とNPO のパートナーシップ事業

(<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f6188/>)

神保:それは良い仕組みですね。

水井:おそらく。NPO 関係については、神奈川県はかなり進んでいる。しかし、そういったシステムを利用とする環境系の団体は現状少ない。自然・環境系よりも介護などの福祉団体や教育団体が多い。

現状、環境系団体の参画が少ないため、私の団体は、県の NPO 協働推進課から注目を頂いている。

| 11

山田:私の団体の拠点である侍従川も神奈川県が一部管理者なのだが、治水事務所との繋がりはあってもこの仕組みは全く知らなかった。県の職員との接点が全くない。横浜には「よこはま川を考える会」という古くからの団体がある。その団体は、私の団体よりも 10 年長く活動されているが、その団体職員のほとんどが横浜市の職員だったようだ。なので、横浜市の職員との繋がりは強い。つまり、県より市のほうが「川が見えている」という印象があるため、県の支援については意外だった。また、神奈川県と横浜市の違いかもしれない。

神保:企業 CSR(社会貢献活動)としての環境教育というテーマは、企業としても組んでみたいという活動分野のひとつだと思うのだが、水井さんは実際に企業とのマッチングの場に行かれて、企業側が持っている環境教育としての CSR のニーズの高まりはありますか？

水井:正直実感はない。本当に CSR の意味で活動している企業はあまり知らない。おそらく海というテーマがわかりづらいという理由もある。例えば、某飲料会社と話をした時に「海にはストーリーがない。」という言葉があった。「海」というテーマだと、株主なり社内組織への説明するストーリーが海だと弱いと意味である。基本的には、企業は CSR といえども、販売戦略としてのイメージアップとなるストーリーが必要。そのため、CSRとしての資金提供を依頼するというよりも、その企業の顧客サービスに沿ったイベントを提案する形しかない。いい意味での、期待できる資金をポンと提供してくれるという話には出会ったことがない。

神保:海の世界環境教育を企業 CSR と組むことでうまくいっている例を知っている方いますか？

鈴木:パシフィコでわかめを使ったパスタ作りを 2 月 16 日にやります。みなとみらい 21 財団から助成を受けている時に、地元の企業と一緒にやるといって提案があり、紹介があった上で、地元の企業とイベントを実施する。おそらく企業も、色んな社会貢献テーマに関心を持ち出したため、「海」にも少し興味を示し始めたようにも感じる。

古川:直接海に目がいくかどうかは別として、企業に対し環境活動に参加するメリットを聞いた時に、社員の啓発になればと良いことが第一の期待値だとの回答があった。社員たちが海や環境に対して考える習慣を持つと、それが引いては企業の底力を向上し、別の分野にも活用できると考え、研修プログラムの一環と考え始めている。また、企業自体が環境教育、ESD のような教育に興味を持ち始めている。CSR 以外にも企業が参画できる道のバリエーションが増えていると考える。海・川の活動の魅力が伝わればもっと企業との連携も図れると思う。

山田:私の団体は、企業連携のイメージは全くなかった。しかし、某アウトドアショップとの連携はある。地元のアウトドアショップとして地元の自然を大事にしようという目的で助成金や店頭での PR 活動、また、フィールドでのイベントへの資金提供をしてもらっている。

神保:会場の方からも例をお願いします。地域連携・企業連携などご意見ありますか？

竹内(たてやま・海辺の鑑定団):千葉県館山市で自然体験活動を提供しながら海辺のエコツーリズムを提供している。助成金も頂いているが、事業収益という形が多い。私たちの活動は、観光分野に結び付くことが多く、結果的に、地域の子どもたちへの活動のみではなく、県外からの来訪者や修学旅行のための、体験活動を提供することが多い。その中で重要なことは、他の団体の連携である。連携を持つこと

によって、地域的価値を高める内容での活動が提供でき、結果として観光につながっている。

つまり、目的をもった連携がすごく必要であると感じている。

また、企業 CSR ではないかもしれないが、館山の夕日栈橋で、地元のライオンズクラブより景品を提供してもらった。つまり、地域にある企業と連携をすれば、面白いことができることもある。

港湾施設を使うことについて

神保: 竹内さんから、夕日栈橋という港湾施設でのイベントについてのお話がありましたが、パネラーの皆さんの中で、港湾施設を使う上での苦労などの経験はありますか？

古川: 都市部の海辺は、川と違って、海にアクセスする上で障害となりうる構造物で囲まれているという現状がある。そのため、既存で使えるものはほとんどなく、アクセスするための工夫が必要。海辺の開発をするという話があった時に、技術的な相談に乗るという名目で、利用しやすいファシリティのあり方を教示した経験がある。つまり、場所を探すのも一つの手ですが、新しくできる場所に対して、その後の利用を考えた施設・工夫をしていただけるような情報を行政に提供する必要があると考えている。

現状、干潟・海浜などの港湾施設については、技術的な指針(ガイドライン)ができていないのが課題となっている。行政が常に必要な情報に接することができる事例集のようなものを用意する必要があると感じている。また、港湾施設を使う際、行政から求められるのは責任範囲や主体の明示である。それが、先ほどのように多くの団体が連携してイベントをする際に、その主体を明確にすることが課題となる場合がある。そのため、どのような形で申請したら、行政が許可を出してくれるのかという点で工夫が必要かと考える。特に、市民団体だけで許可を取るにはどうすればよいかを現在、考えている。

吉野: 先ほど、キーマンの話があったが、私たちの活動の場合、船・ボート・釣りなどに関連した人材が偶然おり、それを活用できている。また、開港祭のイベントについても、商工会議所とのつながりがあり実現している。また、清掃活動などの参加から行政からの信頼を得て、使用許可を頂くことができている。

鈴木: 団体には、二つのタイプがあり、自分たちのグループで楽しみながら活動したいというグループと、海をよくするために集まりましょうという連携を募るグループがある。実際に、グループの中では良い活動をしているが、外には出さない団体もある。しかし、そういうタイプのグループだけだと、その団体がするイベントという形になるため、なかなか許可がおりづらいこともあると思う。我々のように連携して「実行委員会」のような形式で許可をとり、そのイベントを目的にしたグループを作るやり方もある。

水井: 例えば港湾でのシーカヤックをするルール作りをする際に、そのルールを使うユーザーを育てることの必要性を訴えた。せっかくルールを作っても、横浜の在住または勤務する人たちがそれを使わなければ意味がないので、横浜で遊ぶ機会を作ることが大事だと考えた。より多くの人々が港湾で遊ぶようになれば、ニーズが増えるため、行政も変わっていくように思う。そのため、ニーズとかムーブメントを作る必要性を感じている。

神保: そうですね。実体験を通じた意識の変化は大人・子どもを問わず大きいので、ある経験のある人が集まれば色々変化が起こりうるのでしょうか。

それでは、会場から何かありますか？

三好: 私は東京で活動していますが、横浜のみなとみらい周辺でこれだけの活動をされていることに驚きました。東京では葛西臨海公園で海水浴を復活させようという活動をしており、今、港湾局等の認識が少しずつ変わってきています。

今後、5年後、このみなとみらい周辺でこんな事ができそうだ、またはできていけば良いなどの可能性

があれば聞かせてください。

古川: ハゼ釣りをもっと広めたいと考えたい。ある程度の年齢の方だと日本の海辺で育った人たちはハゼ釣りの経験がある。そのような経験が今はなくなっている。小学生・中学生からハゼ釣りを経験して、海のことを知ることが、東京湾再生のひとつのモニタリングにもなると考えている。そして、沢山の子どもたちが海に近づくようになれば、危険性についても理解が深まるのではないかと考える。なので、5年後には東京湾に面する小中学生が少なくとも1回はハゼ釣りをするようになったらなと考えます。

吉野: 5年後の姿としては、市民が許可を得ず、自立的に海辺や川辺を使えるようになってほしい。そのためには、当然安全やマナーについて市民が高い意識を持つようになってほしい。

水井: もっと、その辺りに歩いている人たちが海の中を覗き込むようになってほしい。諸外国では、海辺のすぐそばにはカフェやバーがあると思う。しかし、今の横浜の海辺にはそういった所がない。海のすぐ近くでお茶をしている場所がある。海の近くに人が滞在する場所ができてほしいです。

鈴木: 東京湾の流域には2~300万人の子どもたちが住んでいる。その1/10来るとしても、毎年20万人くらいを相手にしなければならない。今、現実には、それが可能な場や人材がない。そのため、それくらいの人数の子どもたちを相手にできる干潟ができてほしい。そして、10年後には春夏秋冬、海辺で何か遊べる形になってほしい。また、「干潟カフェ」や「蟹カフェ」のような場所ができていけば思います。

山田: 横浜市内の水辺に生き物はたくさんいる。しかし、それが感じられない。なので、それを感じられるためにはどういう姿にするべきかを都市の港湾としてデザインされていてほしい。実際これまで活動してきた中で、最初は川に降りるにも障害がたくさんあった。しかし、活動をしていることでニーズを認められ、梯子や階段付きの公園等などが整備されてきた。そのような整備が進むと良いと考える。あとは、港湾施設での環境プログラムができたらいと思う。もう一つは、色んな体験をしたことのある子どもたちが継続的な活動の場を作りたい。そして、シーカヤックで自転車のようにあちこち行ける整備ができるようになればよい。環境教育プログラムをつくって学校を取り込むことが重要で、学校で体験した子の中でもっと、体験したい子たちの受け皿として、今回発表したような市民団体が必要だと思う。

神保: みなさんの5年後の展望を聞くととても楽しい未来ですね。

そのような5年後を実現するためには、CNACが今後何をすべきかも明確になってきたと思います。

パネルディスカッションはこれで終了いたします。

閉会の挨拶

スピーカー: CNAC 副代表理事 小池潔

皆様お疲れ様でございました。ご登壇の皆様、ご会場にお集まりの皆様本当にありがとうございます。

CNAC は、海離れが進む現状をいかにして、沢山の人が海に来てもらうか。このまま海離れが進むと、海を知り、今後の海と私たちの付き合い方についての認識が失われていくのではないかという危機感から誕生 | 14
しました。

今回、横浜で活動をしている皆様にお話しを聞き、その中から今後役に立つヒントがつかめればと企画いたしました。期待以上のお話が聞けて大変有意義な時間となりました。

まず、都市型の海岸線では避けられない人工物と環境学習がうまく両立できるヒントを頂きました。また、何よりも、「この良さは私だけが知っている」という気概の強い人たちが、自らが楽しんで活動していることが一番大きいことだと感じました。そのことに私たちも大きな力をいただきました。

CNAC では、「仲間を広げよう。活動を広げよう。感動を広げよう」の3つの「広げよう運動」を推進している。

「仲間を広げよう」は、年齢層・年代を問わず、思いを同じにする人たちと連携していこうという思いです。

「活動広げよう」は、色々な活動を広げることによって、色々考えるチャンネルを増やしていこう。

「感動を広げよう」は、全国の活動から“気づき”を頂いて、そこからヒントを広げていこうという思いです。

まさに、本日の横浜のイベントがその第一歩となりました。

本日は、皆様、誠にありがとうございました。今後とも CNAC よろしく願い申し上げます。